2024年2月改訂版

概要版

詳しく知りたい方向けの詳細版もあります。

小学校6年～高校1年相当の女の子と
保護者の方へ大切なお知らせ

HPVワクチンについて知ってください

～あなたと関係のある“がん”があります～

ひと、くらし、みらいのために
厚生労働省
Ministry of Health, Labour and Welfare

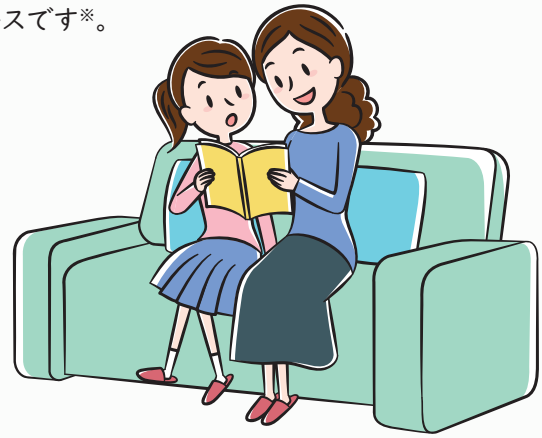
ウイルス感染でおこる子宮けいがん

詳細版 P2~3

「がんってたばこでなるんでしょ？」
「オトナがなるものだから私は関係ない」って思っていませんか？
実はウイルスの感染がきっかけでおこる“がん”もあります。その1つが子宮けいがんです。

HPV（ヒトパピローマウイルス）の感染が原因と考えられています。
このウイルスは、女性の多くが“一生に一度は感染する”といわれるウイルスです※。
感染しても、ほとんどの人ではウイルスが自然に消えますが、
一部の人でがんになってしまうことがあります。

現在、感染した後にどのような人ががんになるのかわかっていないため、
感染を防ぐことがんにならないための手段です。



※HPVは一度でも性的接触の経験があればだれでも感染する可能性があります。

女性の多くがHPV（ヒトパピローマウイルス）に“一生に一度は感染する”といわれる ▶ **がんになる場合も** ▶ **感染を防ぐことがんにならないための手段**

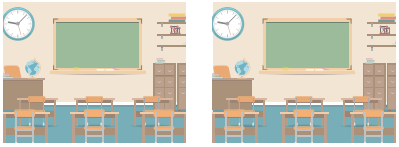
＜何人くらいが子宮けいがんになるの？＞

日本では毎年、約1.1万人の女性が子宮けいがんになり、毎年、約2,900人の女性が亡くなっています。患者さんは20歳代から増え始めて、30歳代までにがんの治療で子宮を失ってしまう（妊娠できなくなってしまう）人も、1年間に約1,000人います。

＜一生のうち子宮けいがんになる人＞

1万人あたり132人

2クラスに1人くらい

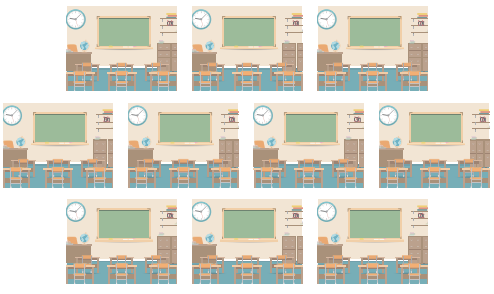


つまりこれってどのくらい？

＜子宮けいがんで亡くなる人＞

1万人あたり34人

10クラスに1人くらい



1クラス約35人の女子クラスとして換算

出典 国立がん研究センター がん情報サービス　2019年全国推計値に基づく累積罹患リスク、2021年累積死亡リスク、2021年人口動態統計がん死亡データより

HPVワクチンの効果

詳細版 P4

HPVの中には子宮けいがんをおこしやすい種類（型）のものがあります。
HPVワクチンは、このうち一部の感染を防ぐことができます。
現在日本において受けられるワクチンは、防ぐことができるHPVの種類によって、
2価ワクチン（サーバリックス®）、4価ワクチン（ガーダシル®）、
9価ワクチン（シルガード®9）*の3種類あります。 *2023年4月から、シルガード®9も公費で受けられるようになりました。
サーバリックス®およびガーダシル®は、子宮けいがんをおこしやすい種類である
HPV16型と18型の感染を防ぐことができます。そのことにより、子宮けいがんの原因の50～70%を防ぎます※1。
シルガード®9は、HPV16型と18型に加え、ほかの5種類※2のHPVの感染も防ぐため、子宮けいがんの原因の80～90%を防ぎます※3。
また、HPVワクチンで、がんになる手前の状態（前がん病変）が減るとともに、
がんそのものを予防する効果があることもわかってきています。

※1・3 HPV16型と18型が子宮けいがんの原因の50～70%を占め（※1）、HPV31型、33型、45型、52型、58型まで含めると、子宮けいがんの原因の80～90%を占めます（※3）。
※2　HPV31型、33型、45型、52型、58型

HPVワクチンのリスク

詳細版 P5

筋肉注射という方法で注射します。接種を受けた部分の痛みや腫れ、赤みなどの症状が起こることがあります。
ワクチンの接種を受けた後に、まれですが、重い症状※1が起こることがあります。
また、広い範囲の痛み、手足の動かしにくさ、不随意運動※2といった多様な症状が報告されています。
ワクチンが原因となったものかどうかわからないものをふくめて、
接種後に重篤な症状※3として報告があったのは、ワクチンを受けた1万人あたり約3～5人※4です。
接種するワクチンや年齢によって、合計2回または3回接種しますが、
接種した際に気になる症状が現れたら、それ以降の接種をやめることができます。
接種後に気になる症状が出たときは、まずはお医者さんや周りの大人に相談してください※5。

※1 重いアレルギー症状（呼吸困難やじんましんなど）や神経系の症状（手足の力が入りにくい、頭痛・嘔吐・意識の低下）
※2 動かそうと思っていないのに体の一部が勝手に動いてしまうこと
※3 重篤な症状には、入院相当以上の症状などがふくまれていますが、報告した医師や企業の判断によるため、必ずしも重篤でないものも重篤として報告されることがあります。
※4 サーバリックス®およびガーダシル®は約5人、シルガード®9は約3人
※5 HPVワクチン接種後に生じた症状の診療を行う協力医療機関をお住まいの都道府県ごとに設置しています。

子宮けいがんで苦しまないために、できることが2つあります

詳細版 P7

①今からできること

日本では、小学校6年～高校1年相当の女の子を対象に、
子宮けいがんの原因となるHPVの感染を防ぐ
ワクチンの接種を提供しています。
HPVの感染を防ぐことで、
将来の子宮けいがんを予防できると
期待されています。
カナダ、イギリス、オーストラリアなどでは
女の子の8割以上がワクチンを受けています。

②20歳になったらできること

HPVワクチンを
受けていても、
子宮けいがん検診は
必要です。
定期的に
検診を受けることが
大切です。

HPVワクチンについて知ってください

すべてのワクチンの接種には、効果とリスクとがあります。
まずは、子宮けいがんとHPVワクチン、子宮けいがん検診について知ってください。
周りの人とお話ししてみたり、かかりつけ医などに相談することもできます。

HPVワクチンを受けることを希望する場合は

詳細版 P4,8

小学校6年～高校1年相当の女の子は、HPVワクチンを公費で受けられます※。
病院や診療所で相談し、どれか1種類を接種します。ワクチンの種類や接種する年齢によって、
接種の回数や間隔が少し異なりますが、いずれのワクチンも、半年～1年の間に決められた回数、接種します。
接種には、保護者の方の同意が必要です。

※公費の補助がない場合の接種費用は、サーバリックス®およびガーダシル®では3回接種で4～5万円、シルガード®9では3回接種で8～10万円、2回接種で5～7万円です。

一般的な接種スケジュール

シルガード®9

1回目の接種を**15歳になるまでに**受ける場合

0か月 1回目 → 6か月 2回目 ※1　合計2回

1回目の接種を**15歳になってから**受ける場合

0か月 1回目 → 2か月 2回目 ※2 → 6か月 3回目 ※3　合計3回

ガーダシル®

0か月 1回目 → 2か月 2回目 ※2 → 6か月 3回目 ※3

サーバリックス®

0か月 1回目 → 1か月 2回目 ※4 → 6か月 3回目 ※5

3種類いずれも、1年以内に接種を終えることが望ましいとされています。

※1　1回目と2回目の接種は、少なくとも5か月以上あけます。5か月未満である場合、3回目の接種が必要になります。
※2・3　2回目と3回目の接種がそれぞれ1回目の2か月後と6か月後にできない場合、2回目は1回目から1か月以上（※2）、3回目は2回目から3か月以上（※3）あけます。
※4・5　2回目と3回目の接種がそれぞれ1回目の1か月後と6か月後にできない場合、2回目は1回目から1か月以上（※4）、3回目は1回目から5か月以上、2回目から2か月半以上（※5）あけます。

HPVワクチンについて、もっと詳しく知りたい方は

このご案内の内容をもっと詳しく説明している
「HPVワクチンについて知ってください＜詳細版＞」や、
その他のご案内をご覧ください。

厚労省　HPV

HPVワクチンに関するよくあるご質問（Q&A）については、こちらをご確認ください。

お問合せ先